opusdei.org

## 属人区長の書簡 (2008年10月)

聖性を目指す者にとって、謙 遜は必要不可欠な徳です。10 月の手紙の中で、属人区長 は、神の助けがあって初め て、そのみ手の中の良き説明 になることができると説明します。

2008/10/09

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

明日の守護の天使の祝日に、オプ ス・デイは創立80年目を迎えます。 これまでの年月は、天に向かって心 からの熱烈な感謝を捧げるよう私た ちを促します。より一層聖母と付き 合うように努めながら、この日を準 備してきました。ご自分の子どもた ちの家族の歩みの一歩一歩に母とし て付き添ってくださった聖母に、特 別な感謝を捧げることにしましょ う。聖ホセマリアと、この道のりを すでに歩み終えたオプス・デイの信 者たち -特にドン・アルバロを思い 出します- と固く一致して、私たち 一人ひとりの感謝を聖母に捧げま す。聖母は絶えず私たちを助け、私 たちの歩みをいつも見守ってくだ さったのですから。そして、1928年 10月2日に神が創立者にお見せに なったこの道を最後まで堅忍できる 賜を、私たちのために天から獲得し て下さるようにもお願いしましょ う。

聖ホセマリアは、10年以上もの間、 主がお望みのことを知るための光を 願い続けました。そのために、福音 書のDomine, ut videam! (ルカ 18,41) 主よ、見えますように、とい う言葉を射祷として使っていました。 この絶え間ない祈りーそれは聖 ちに向けられたものでもありました。 一を通して、あの決定的な瞬間のた めの準備がなされていきました。 の点を、創立者の列福式の際、ラッツィンガー枢機卿は、説教の中でこ う示されました。

「ホセマリア・エスクリバーは、と ても早い時期に、神が計画をおおであること、何かを自分に望んでれることに気付きました。けれかがられがどんなことなのかれがどんなことだらそれがといくでした。そうしたのではでしたのです。聖書を過去のまかと して読むのでも、議論の材料として 読むのでもなく、今の自分に向かっ て、今日私たちに話しかけている言 葉として耳を傾けたのです。自分の 歩むべき道を見出すために、そりが ないて、私たち一人ひと探さなり、自分の場所を探さなり、自分の場所を探さないればならないのです。」(ラッフィンガー枢機卿、1992年5月19日オプス・ディ創立者列福記念ミサでの説 教)

は、すべての人が聖性に召されていることを伝え広め、同時に、プロの 仕事と日常生活の様々な状況や機会 を通して、聖性と使徒職への召し出 しに応えるように多くの人を助ける ため、教会の懐の中で、オプス・デ イという具体的な道を拓くことでし た。

創立者は、神のみ前における自分の 無力さをしっかりと弁えておられま した。主から、分不相応なこの使命 を託されたとき、自分は「ふさわし くなく、耳も聞こえない道具| (聖 ホセマリア、1934年3月19日『指導 指針』7)だったと確信をもって述 べ、またそう記しました。《それ》 が神のものであり、人間の思いつき ではないことを明確にするためでし た。「26歳という年齢(…)と、神 の恩恵と快活さ以外には、何もあり ませんでした。こうして、人間なら ペンを使うところを、主は椅子の足 をお使いになりました。書いたのは

主であることがはっきり分かるため です。それは信じ難いことであり、 また素晴らしいことです。」(聖ホ セマリア、1962年10月2日説教のメ モ)これこそが、創立者が一生の間 確信していたことでした。帰天の 数ヶ月前にこう言われました。「こ うして再び、聖書に言われているこ とが成就しました。愚かで、何の取 り柄もなく、ほとんど存在すらしな いとまで言える者…。主は、そのす べてを集め、ご自分のために働く者 にしてくださいます。こうして、あ の人を道具としてお使いになったの です。| (聖ホセマリア、1975年3 月19日お説教のメモ)

このことは、創立記念日が私たちに 示す根本的な教えであることを、理 解する必要があります。つまり、私 たちは、神が救いの計画の道具とし てお使いになれるよう、謙遜になら なければならないということです。 高慢は、自分にかかりきりになるこ とであり、聖性と実りある使徒職の 大敵として立ちはだかります。逆 に、自分は無価値な者だと誠実に考 え、自分の有する資質は、自分から 出たものではなく、神から頂いたも のだと確信するなら、その時こそ、 神の御手に役立つ道具としての条件 を備えていると言えるのです。

話がここまで来たところで、幾つか のきわめて個人的な質問をすること ができます。神の現存の下に、私は どのように自分を見ていますか。自 分自身で何かを有し、自分だけで何 らかの役に立っていると考えます か、それとも、すべては主の賜であ ると認めていますか。主がご覧に なっているのと同じように自分を見 られるように、誠実に主に願ってい るでしょうか。それと同時に、無に 等しい自分を知ることで、悲観的に なったり、挫折感に襲われたりして はなりません。逆に、主への信頼を 深め、主に全てを委ねるべきです。

聖ホセマリアのあの考察を黙想しましょう。「自分のみじめさを思い知っても絶望してはならない。ためかに、あなたの経済力はゼロである。社会的な力もゼロ、徳につかしるとすれば、膨大な数字になるとすれば、膨大な数字にないか。」(聖ホセマリア、『道』473)

自分の惨めさに思い至ったら、主が 私を呼ばれたのだから、困難から抜 け出るためのあらゆる手段を主が下 さることを確信し、その御手にもっ としっかりすがることにしましょ う。この深い謙遜を土台にして私た ちは、キリスト者としての召し出し が要求する、使徒職における挑戦に 立ち向かうことができます。キリス ト者への召し出しとは、すなわち使 徒職への召し出しであり、そのこと は、福音書にもはっきりと記されて います。主が、ご自分と一緒に生活

させ、後ほど宣教に送り出すため十 二使徒を召し出された時、仰せに なったことです(マルコ3, 13-14参 照)。あの最初の使徒たちの中にお いて、出会う人たちに主のみ名を告 げ知らせるようにと、私たち全員が イエス・キリストに召し出されたの です。「要するに、人を使徒とする のは主であり、その人自身の思い上 がった思いではありません。使徒は 自分で自分を使徒とするのではな く、主によって使徒とされるので す。それゆえ使徒は、常に主に聞き 従わなければなりません」 (ベネ ディクト十六世、2008年9月10日一 般謁見の講話)と教皇様は強調され ます。

使徒は自分の名において語るのではなく、受け取ったことを伝えます。 最初の使徒たちはこのように振る舞いました。現代のキリスト者も同じようにすべきです。最近、ベネディクト十六世は、聖パウロの召し出し

神ご自身が、私たちの自由を取りりまることなく、あらゆる状況である状況である完全な忠実をお望みでありませたことを決していることはどんいも一人ですることはない人でするです。本にするべきではいるがあるとなったもの協力をお望みなります。 神ご自身が、私たちはおいるとなった。 でも完全なお望みなります。 神ご自身が、私たちはどのはないとせいる。 も一人ばっちになることはないとない。 を信しているです。主は私たちにはいるがまます。 は付き添い、私たちにするないけれない。 またも必要となるはないのはいます。 も、常に私たちの協力をお望みなの です。この現実を前にして、創立者はecce ego, quia vocasti me(1サムエル3,6)お呼びになったので参りました、という章句を掘り下げて考えるよう勧めていました。そうです、主は私たちとの会話を保ち続けられ、私たちへの愛に対してもっと深く応えるよう期待しておられるのです。

ベネディクト十六世は、主の弟子の 特徴として、召し出された者である こと、遣わされた者であることの他 にもう一つの条件をあげておられま す。すなわち、模範と教え、業によ る証しと言葉で、使徒としての使命 を効果的に実行することです。聖パ ウロの模範に注目し、次のように言 われました。「《使徒》という称号 は眉書きだけの称号ではなく、また 眉書きだけの称号であってもなりま せん。《使徒》という称号は、使徒 が全生活をもって務めを果たすこと を具体的かつ徹底的な形で表しま

す。」 (ベネディクト十六世、2008 年9月10日 一般謁見の講話)

聖パウロはコリントの人たちに、 Caritas Christi urget nos (2コリン ト5.14) キリストの愛が私たちを駆 り立てている、としたためました。 人々の救いへの熱意が彼を駆り立て ていたのです。それは、「全ての人 のために死んでくださったしキリス トに倣うことだったのです。「その 目的は、生きている人たちが、もは や自分自身のために生きるのではな く、自分たちのために死んで復活し てくださった方のために生きること なのです。」そして結論づけます。 「だから、キリストと結ばれる人は 誰でも、新しく創造された者なので す。古いものは過ぎ去り、新しいも のが生じた。」(2コリント 5.15.17)

福音固有のこの新たな命は、他の 人々に伝染し、一人ひとりが愛の炎

で燃え立つまでになるべきです。 人々がイエス・キリストを知り、主 に従い、主を愛するように、あらゆ る可能な手段を講じるのは、神の愛 を知ったものにとって必然的なこと です。聖ホセマリアはこう述べてい ます。「小さくて混乱しているこの 世界において、キリストの教えを説 明する人がいないなら、可哀想な人 たちはどのように洗礼を望むことが できるでしょうか。Fides ex auditu 信仰は聞くことによって始まる、と 聖パウロは言っています。聞いたこ とのない方を、どうして信じられよ う。また、宣べ伝える人がなけれ ば、どうして聞くことができよう (ローマ10,14)。イエス・キリスト はこう振る舞われたのではありませ んか。主は模範を与えるだけでな く、教えも述べられました。Coepit facere et docere 行い、そして教え られた(使徒言行録1.1)。| (聖ホ セマリア、1968年1月5日団欒のメ 王)

安楽さや怠惰の隠れ蓑である言い訳 を前にして、こう話していました。 「なぜ人の生活に干渉しなければな らないのか。それは、キリスト者と しての義務だからです。また、キリ ストが、ペトロやパウロ、ヨハネや アンデレの心に入り込まれたよう に、あなた方と私の生活に入り込ん で来られたからです。使徒たちも同 じことをするよう教わったのです。 もし、行って福音を伝えなさいとい う命令を主から受けた後、彼らがど こにも出かけず、十二使徒だけで留 まっていたなら、教会は存在しな かったことでしょう。| (聖ホセマ

近々、教会の生活と使命における神のみことばをテーマとする通常司教会議が始まります。ご存じのように 聖座からの任命を受けた私も参加します。教皇様のご指示に沿って、聖ペトロの後継者を囲むこの集まりが

リア、1960年2月14日団欒のメモ)

実りあるものになるよう祈り、祈ら せるようにお願いします。

日々、神のみことばをよく知るよう に努めましょう。それには、教会の 聖伝の光と教導職に導かれて、聖書 を愛し、敬意をもって聖書に親しむ ことです。特に福音書に親しみ、主 から学び、その教えを実行するよう にしましょう。聖パウロがしたよう に、opportune et importune (2テ モテ4.2参照)折りがよくても悪くて も、主の教えを広めましょう。こう して、福音を宣べ伝えるように努力 するなら、生涯の終わりに使徒と共 に宣言することができるでしょう。 「私は戦いを立派に戦い抜き、決め られた道を走り通し、信仰を守り抜 きました。今や、義の栄冠を受ける ばかりです。正しい審判者である主 が、かの日にそれを私に授けてくだ さるのです。しかし、私だけでな く、主が来られるのをひたすら待ち

望む人には、誰にでも授けてくださいます。 | (2テモテ4,7-8)

今月は聖母の祝日もあります。マリ アのものになることを渇望して、よ り頻繁に聖母の取り次ぎによりすが りましょう。より信心を込めてロザ リオを唱えましょう。聖性の広大な 戦場における「強力な武器」(聖ホ セマリア、『聖なるロザリオ』前書 き)なのですから。9月20日の土曜 日には、所用のためサラゴサを訪ね ました。聖母に捧げられたあの聖堂 での聖ホセマリアの祈りに一致しつ つ、ピラールの聖母像の前で祈りま した。またトレシウダにも行き、そ こでも創立者の祈りに堅く一致し て、必要な多くのことを聖母に託し ました。翌日の日曜日、ローマに帰 りましたが、バルセロナにある大聖 堂でメルセスの聖母像の前にぬかず くことができなかったのを、残念に 思っています。

6日に6周年を迎える創立者の列聖記 念日が、一人ひとりに対する強い呼 びかけとなるように、毎日祈ってい ます。創立者の子どもらしくなりた いと心の底から思っているなら、 日々、nunc coepi (詩編76,11(Vg)) 今始める、を喜んで実行しつつ、回 心と聖性の誠実な熱意を育まなけれ ばなりません。日々、回心するよう に努めないならば、個人的な使徒職 の効果はありません。これが、2002 年2月26日に列聖式の日付が発表さ れて以来の準備期間中に繰り返した ことです。そして、聖ホセマリアが 生前から勧め、今も天国から、日々 勧め続けておられるこの勧めが、そ の力を失うことは決してありませ ん。

心からの愛を込めて祝福を送ります。

皆さんのパドレ

†ハビエル

## ローマ、2008年10月1日

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2008nian-10yue/ (2025/10/28)